

社会福祉士養成における相談援助実習指導の評価方法に関する研究

—ルーブリック評価法の応用可能性について—

The study of the evaluation method in the training of certified social worker practice
—About the application possibility of Rubrics—

小林 哲也¹, 佐々木 宰¹, 川廷 宗之¹, 杉野 聖子¹, 原田 聖子¹, 宮脇 文恵¹,
永嶋 昌樹¹, 三橋 真人¹

¹大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科

Tetsuya Kobayashi¹, Tsukasa Sasaki¹, Motoyuki Kawatei¹, Seiko Sugino¹, Seiko Harada¹, Fumie Miyawaki¹,
Masaki Nagashima¹, and Mabito Mitsuhashi¹

¹The Department of Human Welfare, Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University
2-7-1 Karakida, Tama-city Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：社会福祉士，相談援助実習指導，ルーブリック

Key words : Certified social worker, The training of certified social worker practice, Rubrics

抄録

現在，日本の社会福祉士養成は，大きな転換期を迎えている．2007年12月に社会福祉士及び介護福祉法が改正され，2009年度より新たな養成カリキュラムが開始された．このような転換の背景には，国民の福祉・介護ニーズの多様化・高度化があり，社会福祉士には，このようなニーズに応えるような一定水準の実践力が求められるのである．

しかし，ここで，どのようにして一定水準の実践力を養成するのかという課題に直面する．これは，どのように実践力を養うのかという実習の方法論の課題であると同時に，どの程度であれば一定水準に達成したと見なすのかという評価方法の課題でもある．そこで，本研究では，新しい教育評価法である「ルーブリック (Rubrics)」に注目し，相談援助実習指導の評価に対するルーブリック評価の応用について，実際に，実習前の相談援助実習指導の実践に応用して研究をおこなった．

1. はじめに

2007年12月に社会福祉士及び介護福祉法が改正されたことにより，現在，日本の社会福祉士養成は，大きな転換期を迎えている．養成カリキュラムが新たに編成され，2009年度より新たな養成カリキュラムが開始された．また，社会福祉援助技術現場実習から相談援助実習（以下実習とする）に名称を変えた実習においても，2011年度には，実習指導者の経過措置が終了したことから，本格的に新たな養成カリキュラムがスタートされている．このような養成カリキュラム改正の必要性について，厚生労働省は「国民の福祉・介護ニーズの多様化・高度化があり，人材の確保・資質の向上を図ること」とその目的を説明している^[1]．このように，国民の福祉・介護ニーズの変化によっ

て，昨今，社会福祉士を取り巻く環境は大きく変化してきている．

このような背景のもとで始まった新たな養成カリキュラムであるが，多様化・高度化するニーズに対して，それに対応できるような実践力をどのようにして身につけるのかという課題に直面する．このような課題に対して，社団法人日本社会福祉士養成校協会は，2013年に「相談援助実習・実習指導ガイドライン（案）」^[2]を提示し，卒業時点での獲得すべき実践力を一定にすべく，実習の評価表の標準化に取り組んでいる．では，何故社会福祉士の養成において，このような実習教育の標準化が必要なのだろうか．それは，社会福祉士の相談援助の実践の目的が，日常生活を営むのに支障のある利用者に対して，相談援助をとおして「最

善の利益をもたらす」ことにあるからだと考えられる。たとえば、社会福祉法第1条においては「福祉サービスの利用者の利益の保護」が謳われ、日本社会福祉士会の倫理綱領には、利用者に対する倫理責任として「社会福祉士は、業務の遂行に際して、利用者の利益を最優先に考える」と利用者利益の最優先が明記されている。このように、社会福祉士の相談援助の実践は、利用者以最善の利益をもたらすことにあると言える。

しかし、当然のことながら、社会福祉士の実践力にばらつきがあったのでは、全ての利用者の利益にばらつきがみられ、最善の利益をもたらすことは困難となる。つまり、どの社会福祉士が対応しても、利用者にとって最善の利益をもたらすことができるような一定水準の実践力が求められるのである。それは、見方を変えれば、養成校における相談援助実習において、一定水準の実践力の養成が求められることにもつながる。この点について、米本秀仁は、社会福祉士養成校協会関東甲信越ブロック主催の第8回社会福祉実習教育推進大会の講演において、「どの大学を卒業したかではなく、今後はどの大学を卒業していても、一定の技術を持った社会福祉士が求められる」ことを指摘している^[3]。さらに、川上富雄は、国家試験と実践力について言及し、「国家試験を受ける段階で、技能の取得については一定水準の実践ができるようになっていくという前提がある」としている^[4]。この二者の指摘からも、社会福祉士の養成には一定水準の実践力が求められることがわかる。

では、どのようにして一定水準の実践力を養成するのかということが課題となる。ここでいう課題とは、どのように実践力を養うのかという実習方法論であると同時に、どのような実践力をその評価の対象とし、どの程度であれば一定水準に達成したと見なすのかという評価の方法の課題でもある。つまり、一定水準の実践力をどのように評価するのかという評価方法が重要となる。本研究では、その中でも特に、実際に実習に行く前段階である「相談援助実習指導」における評価方法に重点をおいて研究をおこなった。その理由として、相談援助実習指導とは、相談援助実習に係る実践的な技術を学び、社会福祉士として求められる能力を総合的に取得することをねらいとしており、相談援助実習指導においても、実習に臨むための一定水準の実践力の養成が求められることは当然

なことであると考えられるからである。つまり、一定水準の実践力を養成するために、相談援助実習指導の授業運営によって生じる相違を極力小さくし、さらに、その授業から学んだことを評価する方法が求められることになる。

このように標準化された授業運営とその学生の資質を測る評価方法として、本研究では、主に教育の分野で用いられている新しい教育評価法である「ルーブリック (Rubrics)」に注目した。既に、実習前教育としての相談援助実習指導の評価に対して、ルーブリック評価の応用についての研究が続けてきており、実習前教育における相談援助実習指導の課題を分析し、応用の可能性を探ってきた。本研究では、昨年度までの研究成果を踏まえ、実際にルーブリック評価を作成することを試み、その研究の成果を公表するものである。なお、本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の助成を受けて研究がおこなわれたことを断っておく。

2. 研究の視点および方法

2.1. 研究の対象について

2.1.1. 相談援助実習指導の公的位置づけ

相談援助実習指導とは、相談援助実習において学生が身につける事項や目的のために、実習の前後に置かれている科目である。2008年に出された厚生労働省「社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」^[5]によると、相談援助実習指導のねらいについて、①相談援助実習の意義について理解する、②相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際に理解し実践的な技術等を体得する、③社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する、④具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する、以上の4点が挙げられている。今回の研究対象となるのは、①に挙げられている「相談援助実習の意義」について理解することと、③に挙げられている「社会福祉士として求められる資質」となる。授業時間については、規定によると90時間の授業時間が求められており、30時間の授業が3科目ということになる。大学等の養成校に多くみられる相談援助実習指導の体系は、共通基盤についてジェネリックに学ぶ「基礎」、実習

CIVIC ENGAGEMENT VALUE RUBRIC



Definition
Civic engagement is "working to make a difference in the civic life of our communities and developing the habit of knowledge, skills, values, and motivation to make that difference; it means promoting the quality of life in a community through both political and non-political processes" (Broughton from Civic Responsibility and Higher Education, edited by Thomas Ehrlich, published by Civicus from 2001. Preface, page 1). In addition, civic engagement means proactive actions wherein individuals participate in activities of personal and public concerns that are both individually life-enriching and socially beneficial to the community.

Evaluators are encouraged to assign a zero to any work sample or collection of work that does not meet benchmark level performance.

	4	3	2	1
Diversity of Communities and Cultures	Demonstrates evidence of alignment in one attitude and belief because of working within and learning from diversity of communities and cultures. Promotes other engagement with diversity.	Reflects on how one attitude and belief is different from those of other cultures and communities. It exhibits curiosity about what can be learned from diversity of communities and cultures.	Has awareness that one attitude and belief is different from those of other cultures and communities. Exhibits little curiosity about what can be learned from diversity of communities and cultures.	Expresses attitudes and beliefs as an individual, from a one-sided view, in addition or contrast to what can be learned from diversity of communities and cultures.
Analysis of Knowledge	Connects and synthesizes knowledge, facts, theories, etc. from one's own academic study field discipline to civic engagement and to one's own participation in civic life, public, and government.	Applies knowledge, facts, theories, etc. from one's own academic study field discipline to civic engagement and to one's own participation in civic life, public, and government.	Begins to connect knowledge, facts, theories, etc. from one's own academic study field discipline to civic engagement and to one's own participation in civic life, public, and government.	Begins to identify knowledge, facts, theories, etc. from one's own academic study field discipline that is relevant to civic engagement and to one's own participation in civic life, public, and government.
Civic Identity and Commitment	Provides evidence of experience in civic engagement activities and describes what she/he has learned about her/himself as it relates to a realized and clarified sense of civic identity and continued commitment to public action.	Provides evidence of experience in civic engagement activities and describes what she/he has learned about her/himself as it relates to a growing sense of civic identity and commitment.	Provides evidence of experience in civic engagement activities in general from opportunities or course requirements rather than from a sense of civic identity.	Provides little evidence of her/his experience in civic engagement activities and does not connect experience to civic identity.
Civic Communication	Takes communication strategies to effectively express, listen, and adapt to others to establish relationships to further civic action.	Effectively communicates in civic context, showing ability to do all of the following: express, listen, and adapt their messages based on others' perspectives.	Communicates in civic context, showing ability to do more than one of the following: express, listen, and adapt their messages based on others' perspectives.	Communicates in civic context, showing ability to do one of the following: express, listen, and adapt their messages based on others' perspectives.
Civic Action and Reflection	Demonstrates independent experience and also includes a level of analysis or insight in civic engagement activities, accordingly reflecting insight on analysis about the aims and accomplishments of civic actions.	Demonstrates independent experience and new analysis of civic actions with reflective insight or analysis about the aims and accomplishments of civic actions.	Has clearly planned or clearly focused actions and begins to reflect on how her/his these actions may benefit individuals or communities.	Has experienced with some civic activities but shows little meaningful understanding of their aims or effects and little commitment to future action.
Civic Consistency/Structure	Demonstrates ability and commitment to independently work across and across communities, contexts and structures in civic action.	Demonstrates ability and commitment to actively and consistently contribute and structure in civic action.	Demonstrates experience identifying potential ways to participate in civic contexts and structures.	Experiences with civic contexts and structures, but not able to be an active participant.

* 全米カレッジ・大学協会 (AAC&U) のホームページより抜粋

図1 全米カレッジ・大学協会 (AAC&U) によるルーブリックの例

をおこなう分野についてスペシフィックに学ぶ「専門」、実習後のフィードバックをおこなう「事後」の3段階で相談援助実習指導がおこなわれている。

2.1.2. 大妻女子大学における相談援助実習指導

本学の相談援助実習指導の教員間で、相談援助実習に臨むにあたっての共通基盤となる「学生に必要な資質とは何か」ということが課題となった。本学では、実習前教育に重点をおいており、相談援助実習指導については、規定の90時間より30時間多く、実習前に30時間多く授業時間が設けられているのが特徴である。本学では相談援助実習を3年次より開講し、相談援助実習指導を「相談援助実習指導Ⅰ」、「相談援助実習指導Ⅱ」、「相談援助実習事前指導」、「相談援助実習事後指導」の4段階で開講している。この内、社会福祉士及び介護福祉士法が定める指定科目「相談援助実習指導」の読み替えにあたる科目は「相談援助実習指導Ⅱ」、「相談援助実習事前指導」、「相談援助実習事後指導」の3科目であり、本学では指定の科目より1科目多く開講していることが特徴となる。つまり、規定では相談援助実習指導の時間数は90時間(1科目30時間×3科目の計算)となっているところを、本学ではそれより30時間多い120時間、相談援助実習指導を開講しているということになる。そして、この4科目の中で、今回研究対象としたのが「相談援助実習指導Ⅱ」である。

この相談援助実習指導Ⅱであるが、授業形式としては、少人数でおこなう演習形式が中心であり、平成25年度は106名の学生が受講し、6名の教員

が受け持った。つまり、1クラス17名~18名の構成ということになる。講義内容は、「実習での学びの意義」、「職業人、専門職として」、「実習記録とスーパーヴィジョン」、「実習計画の作成」などについて授業がおこなわれた。授業形式は、少人数の演習形式であり、授業を通じて相談援助実習に臨むための準備をおこなうことを目的としている。この講義内容は、高齢者、障害者、児童などの専門的に区別される知識や技術ではなく、全ての実習生に共通する社会福祉士の実習を迎えるにあたっての必要とされる共通基盤を学ぶことになる。

2.2. 研究方法

本研究では、ルーブリック評価の作成を中心に分析をおこなっている。ルーブリック評価とは、教育評価方法の一つであり、評価となる目標を項目ごとに分けて記述し(criteria)、達成度について数値で示した基準(standard)を示したものである。具体的には、学習結果としてのパフォーマンス(その人の持つ思考、判断、スキルなど点数化出来ないもの)の目安を数項目に分けて記述し、学習の達成度を判断する基準を示す評価方法として、主に教育分野において盛んに用いられるようになってきている(図1参照)。

これまでの教育評価方法は、多肢選択法や正誤法による客観テストによる数値を相対的に評価するものが主流を占めており、教員が提示した問題に対して、正解の数で学生が評価されてきた。しかし、知識・理解の容量に対しては、客観テストで判断できるにしても、その人自身が持つ知識・理解を活用するようなパフォーマンスの評価を点数で相対的に評価することは困難である。たとえ

ば、学生のレポートにみられる思考、判断、スキルなどのパフォーマンスを評価する場合などが、それに当てはまり、他の人と比較して点数評価することは難しい。

ここで評価すべきことは、学生が他の学生と比較して出来たかどうかではなく、教員が求めるものに対して、学生がどの程度まで達成できているのかを評価することである。このような今まで、学生を競わせるような点数至上主義における相対的な教育評価法を改め、学生の持ちうる思考、判断、スキルなどのパフォーマンスを評価するために用いられるようになったのが、ルーブリック評価なのである。そして、このルーブリック評価を相談援助実習における実習前教育の評価に用いることを検討したのが本研究となる。

本研究におけるルーブリックの作成とその分析については、次のような手順でおこなった。まず、相談援助実習指導Ⅱの授業を担当する教員で話し合い、いくつかの単元に分けて、6名の教員でそれぞれ担当する単元を決定した。次に、教員は担当する単元の授業の講義内容と、それをもとに担当する講義のレポート課題に関するルーブリックを作成した。最後に、各教員が授業をおこない、ルーブリックを使用して、そのレポート課題の評価をおこなった。

2.3. 先行研究

相談援助実習の評価に関する研究について、社会福祉士の資格が成立した1987年以降をみると、米本(1990)^[6]は、実習生自身の実習の評価という視点から分析を行っている。大学、現場、学生の三者で構成されている実習について、大学、現場からの二者の実習評価については重視されているものの、実習生自身が実習において何を学び、どのようなことを感じたのかという評価については軽視されているとして、実習生の評価という視点から分析を行った。さらに、池田(1991)^[7]は、実習先と学生で統一評価様式の評価表を用いて、その評価結果の相違を実証的な手法を用いて分析し、その結果から実習教育の課題について探っている。これら2つの研究は、評価結果を応用した研究である。

評価方法という観点からの論文については、高橋(1991)^[8]のトロント大学大学院における「コンピテンシー・モデル(Competency Model)」によ

るソーシャルワーク実習教育システムについての研究が挙げられる。コンピテンシーとは、職務や役割における効果的ないしは優れた行動に結びつく個人特性であり、コンピテンシー・モデルとは、学生に対して、実習において何を学んで欲しいのかという到達目標を具体的に示し、そこから実習教育全体を組み立てていくものである^[9]。つまり、簡潔言えば、教員が社会福祉士として求められる能力を予め示すという評価法である。コンピテンシー・モデルによる評価では、項目ごとに求められる能力が示され、数段階で数値評価するものから、出来たかどうかで評価するものまであり、現在、養成校で用いられている相談援助実習の評価の多くは、このコンピテンシー・モデルに基づいていると思われる。

さらに、評価方法に影響を与えた大きな変化としては、2000年の社会福祉基礎構造改革が挙げられる。基礎構造改革では、福祉サービスの提供が従来の措置制度中心から、契約制度中心に移行するにより、福祉サービスの質の確保が課題となった。これに伴い、社会福祉士などの福祉サービス提供に関わる福祉従事者の「社会福祉教育の質」も問われるようになったのである。例えば、日本社会福祉教育学校連盟は、『社会福祉教育年報2005年版』において、テーマを「今改めて社会福祉教育の質を問うーわれわれは社会の要請に込えているのか」として、社会が求めている社会福祉士に成りえているのかを課題としている^[10]。また、その中で米本(2006)^[11]は、卒業時の到達能力あるいは到達目標を明らかにしていかないといけなことを指摘し、コンピテンシー・モデルだけで押しつけていけるのか課題があることを述べている。さらに、この米本(2006)の指摘を受けて、中村(2008)^[12]は、コンピテンシー・モデルは、実習のアウトプットしか評価できないことを指摘し、医療の質を評価するモデルである「ドナベディアン・モデル(Donabedian's Model)」を実習教育に応用することの可能性について言及した。ドナベディアン・モデルとは、医療の質を「構造(structure)」、「過程(process)」、「結果(outcome)」という3つの側面からトータル的に評価するものである。中村は「実習教育の質」について、学生の学習成果のみで評価するのではなく、実習教育体制や実習教育内容などの構造の評価も必要であることを指摘し、それが実習教育の質を保証することにつな

がるとしている。

このように先行研究をみると、実習教育に関する研究は多くみられ、実習の評価に関する研究も多い。しかし、それは「実習教育の成果を学生の評価から分析する研究」や「実際の実習の評価項目に関する研究」など多様である。しかし、実習教育の評価方法自体についての研究はあまりみられなかった。さらに、実習後の評価に対する研究は多いが、学生が相談援助実習に臨むにあたっての基準を示すような実習前の評価に関する研究は、あまりみられないのが現状である。

3. 研究報告

3.1. 相談援助実習前教育研究会の実施

相談援助実習指導Ⅱを担当する教員で集まり研究会を実施し、ループリックの作成について検討した。本研究会においてループリックを作成する上で、課題となったのが授業をどのように評価することが学生にとって、最も効果的なのかということであった。話し合いの結果、具体的に①授業の単元化、②評価する対象の設定、③授業の水準化、以上の3点が挙げられた。この3点について話し合われたことについてまとめる。

3.1.1. 授業の単元化

まず、①授業の単元化であるが、相談援助実習に臨む学生に共通する必要な資質とは何かについて検討することから始まった。前年度までは、各授業回でテーマを設定して授業をおこなっていた。話し合いがおこなわれる中で、この各回のテーマには、共通する部分が多くあるのではないかということになった。つまり、共通する部分を抜き出すことで、いくつかにまとめる「単元化」が可能なのではないかと考えたのである。そこで、各回のテーマに共通することを話し合い、単元化をおこなうという試みをおこなった。

話し合いの結果、「実習での学びの意義」、「職業人、専門職として」、「実習記録とスーパーヴィジョン」、「実習計画の作成」の4単元となった。「実習での学びの意義」については、3回の授業がおこなわれ、「なぜ実習に行くのか」という学生自身の振り返りから始まり、利用者に対する責任、実習施設と養成校との実習契約などについて、具体的な実習の内容を学んでいく。この単元において学生は、実習での学びの意義という実習のベース

となる部分を養うことになる。

次に、「職業人、専門職として」については、同じく3回の授業がおこなわれ、学生に対しては、社会人としての自覚を促すことから始まり、職業人としての基本的なマナーやルールを学び、社会福祉士として規範となる倫理綱領など具体的な部分を学んでいく。この単元において、学生は、「社会人としての自覚」、「社会福祉士としての自覚」について学ぶことになる。

「実習記録とスーパーヴィジョン」についても、同様に3回の授業がおこなわれ、実習中の学びの方法について学ぶ。これは、実習中の学びの方法を学習すると同時に、実習へのイメージを少しでも具体化することで、学生の不安を軽減する目的もある。具体的な実習中の学びの方法については、実習記録の方法や実習指導者から受けるスーパーヴィジョンの活用方法が挙げられる。実習をおこない、それを記録し、それに基づいて指導を受けるとい実習の一連の流れに沿っている。

最後に、「実習計画の作成」については、2回の授業がおこなわれ、実習でおこないたいことを具体化していく方法を身につける。実習での学びを充実させるために、実習でおこないたいことを明確にし、それを達成するために計画をたてるということを学習する。実際の実習計画の作成は、その後の専門的な学習をおこなう相談援助実習事前指導でおこなわれ、相談援助実習指導Ⅱは、そのベースとなる基本技術を学ぶことになる。

3.1.2. 評価する対象の設定

次に、評価する対象の設定についてである。ループリックを使用し、何をどのように評価するかという対象の検討をおこなった。これは、①授業全体を評価するのか、②単元ごとに評価するのか、③授業ごとに評価するのか、④学生の提出してきたレポートを評価するのか4パターンが考えられる。学生が相談援助実習指導Ⅱの授業を通じて、何を学んだのかを評価するのであれば①、学生に共通する必要な資質による単元を評価するのであれば②、各授業で学んだことを個別に評価するのであれば③、学生個人のパフォーマンスを評価するのであれば④ということになる。

今回の授業では、④の学生の提出してきたレポートを評価するためのループリックが作成された。その理由として、ループリックを最も活用できる

のが、レポート評価であると考えたためである。学生が提出してきたレポートを評価する際には、次のような問題が考えられる。まず、提出されたレポートの評価には、他の学生と比較するような相対評価が馴染まないということである。レポートは、授業ごとに課題が設定され、その授業に関することをテーマとしてレポート作成がおこなわれる。レポートは、ペーパーテストのように明確な解答があるわけではなく、知識量を計測して点数化し、相対的に評価するようなことが難しい。そのため、その人の持つ思考、判断、スキルなど点数化出来ないものの目安を数項目に分けて記述するルーブリックの活用が有効となると考えたのである。

もう一つの問題として、レポートのフィードバックが挙げられる。学生自身がステップアップしていくためには、教員がレポートの評価を早急にフィードバックすることが重要である。それには、ルーブリックの活用が有効であると考えられる。たとえば、学生から提出されたレポートを100点中20点と採点したとする。学生は、採点されて返却されたレポートから、どこがどのように悪いのかを理解し、そこから改善していくことは可能であろうか。知識量を問うようなペーパーテストであれば間違えた箇所を復習し、正答を導くなどの改善していくことが可能となる。しかし、20点として返されたレポートを改善するために復習することは難しい。つまり、レポートに課された意図を達成するためのステップアップがここでなされなくなるのである。改善策として、教員には、提出されたレポート一つひとつに対して、学生がステップアップするためのコメントが求められる。しかし、その量が多くなれば、時間も多くなり、コメントも単純なものに陥りやすい。さらに、その評価の基準も大きくぶれてしまうことがある。

このような問題点に対しても、ルーブリックを活用することが有効となる。ルーブリックは、各段階で達成する目安が示されていることから、学生は、評価されたルーブリックで自分の評価を確認し、次のステップがあれば、その目安に従って自分のパフォーマンスを改善していくことになる。このように、レポート評価においてルーブリックは大変有効なものとなる。

3.1.3. 授業の水準化

最後に、授業の水準化である。相談実習指導においては、どの学生に対しても一定水準の実践力を養成するために、授業運営から生じる相違を極力小さくすることが求められる。相談援助実習指導Ⅱの授業は演習形式であり、17名～18名の少人数クラスで6クラスに分けて、それぞれ担当教員を設けている。研究会において話題となったのが、一定水準の実践力を養成するために、どのようにして授業内容を水準化するのかということであった。

しかし、その一方で、授業内容を水準化することが、本当に一定水準の実践力を養成することにつながるのかという新たな問題も提起された。授業内容の水準化が、必ずしも一定水準の実践力を養成することとイコールの関係にはならないのではないかということである。たとえば、講義形式の授業をみれば、全く同じ内容の授業を実施しても、学生の成績には、ばらつきがみられるものである。つまり、同一の内容の授業をおこなえば、同じ結果を示すとは限らないのである。相談援助実習において、教員に求められることは、その実践力の一定水準を目に見える形で学生に示すことであり、身につけたという基準をきちんと評価することである。さらに、身につけていない学生に対しては、一定水準に至るまでの過程を指導することも求められる。つまり、授業内容を標準化するだけではなく、一定水準の実践力に至るまでの過程を可視化し、指導していくことが求められるのである。

この点においてもルーブリック評価が有効となる。既述のとおり、ルーブリック評価は、その人の持つ思考、判断、スキルにみられるパフォーマンスなどの点数化出来ないものの目安を数項目に分けて記述し、その達成度を判断する基準を示す評価方法である。これを相談援助実習に当てはめれば、「一定水準の実践力」が相談援助実習においてルーブリックを用いて評価されるパフォーマンスであり、本研究会においては、実習に臨む学生に求められる実習前教育における実践力が、そのパフォーマンスとなる。実習前教育である相談援助実習指導Ⅱにおいて、ルーブリック評価を用いることは、実習に臨むにあたって必要な実践力の目安を数項目で示し、それぞれの達成度を判断する基準を明確にしていくことである。そうするこ

とで、一定水準の実践力を養成していくことになる。

回数	テーマ	単元
第1回	相談援助実習の取り組み方	実習をおこなう上での手続き
第2回	実習配属のための試験	
第3回	実習先選択説明会	
第4回	相談援助実習とは	実習での学びの意義
第5回	体験学習から学んだもの	
第6回	相談援助実習に向けての学び	
第7回	市民として生きる社会人としての自	
第8回	職業人として働くということ	
第9回	専門職として働くということ	職業人、専門職として働くこと
第10回	実習記録の意義とその記述方法	
第11回	実習記録における考察の方法	実習記録とスーパーヴィジョン
第12回	スーパーヴィジョンの理解と活用法	
第13回	実習記録におけるスーパーヴィジョン	
第14回	実習の目的について考える	
第15回	実習目標と実習計画	実習計画の作成

図2 相談援助実習指導Ⅱ授業予定

3.2. ルーブリック評価作成報告—相談援助実習指導Ⅱの授業の実施とレポート課題—

相談援助実習指導Ⅱの授業は演習形式であり、17名～18名の少人数クラスで6クラスに分けて、それぞれ担当教員を設けている。授業は、15回の実施となっており、3回目までは実習配属をおこなう上での手続きということになる。つまり、実質4回目から、演習形式で実習に臨むにあたって必要な実践力を養うことになる。内容は、「実習での学びの意義」、「職業人、専門職として働くこと」、「実習記録とスーパーヴィジョン」、「実習計画の作成」の4単元から成り、12回の授業をおこなうことになる(図2参照)。授業の組み立てについては、1つの授業に対して、レポート課題から授業内容までを1人の教員が担当し、他の教員は組み立てられた資料を用いる。つまり、6人の教員がいることから、1人の教員が2～3回の授業を受け持つことになる。

レポート課題は、その授業の前週に授業内容と関係するように課され、そのレポート課題をもとに授業が展開されることが前提となる。そのため、学生にとっては、レポート課題への取り組みによって、授業の効果が左右される重要なものとなる。なお、課題は授業実施日の2日前までに担当教員に提出することになっている。つまり、学生にとっては、提出したレポート課題が重要となり、そのレポート課題がどのように評価されるのかによって、授業の理解度もかわる。また、それを評価する教員の側においても、2日間と僅かな期間で、

複数教員が同一の水準で評価をおこなわなくてはならないという条件が課せられる。このように、相談所実習指導Ⅱにおいて、レポート課題をどのように評価するのかということは重要な課題となり、このような課題に対して有効となるのが新しい教育評価方法であるルーブリックである。次に、実際におこなわれた授業とその課題評価のためのルーブリックについて紹介していく。

3.2.1. 課題評価ルーブリック

次に、実際の授業の取り組みとそれに対する作成された課題評価のルーブリックについてみていく。今回の報告は誌面の都合上、「職業人、専門職として働くこと」、「実習計画の作成」2つの単元のルーブリック評価について紹介する。

a 課題① 職業人、専門職として働くこと (a) 授業の概要

単元「職業人、専門職として働くこと」は、「第7回 市民として」、「第8回 職業人として」、「第9回 専門職として働く」という全3回の授業で構成されている。この単元の必要性は、実習が学生でありながら、施設・機関で働く社会人となるという一面も持つことにある。大学などの学生文化においては、授業に遅れる・欠席する、提出物が遅れる・怠るなどによる結果は、学生自身の個人に帰属する。しかし、社会人文化においては、勤務先に遅れる・欠席する、仕事の書類が遅れる、怠ることによる結果は、勤務先に帰属することになり、決して許されることではない。これは、学生が学費を支払っている消費者という立場であるのに対し、社会人が働くことで勤務先から報酬を受けるという立場の相違からくるものであると言える。学生は、一時的ではあるにしても、実習を通じて社会人文化に触れることになる^[13]。つまり、実習に臨むということは、社会福祉士としての技術を身につけることであると同時に、ひとりの市民、あるいは職業人としての思考や行動様式、社会人としてのルールが求められてくる。そのため、社会人としての基本的なルールを学ぶ必要が出てくるのである。

この単元の授業をみると、「市民」、「職業人」、「専門職」と段階を踏んでいく。まず、広く「市民」としての社会人に焦点をあて、最後に「専門職」としての社会人に具体化していくことになる。

課題5「インタビュー報告書『職業人の常識と学生へのアドバイス』」

	学籍番号：		名前：	
	3	2	1	0
レポートの提出	提出期限を守り、かつ次のすべてに該当する場合 ・タイトルを書いている。 ・氏名・学籍番号を書いている。 ・送付メールに本文を書いている。 [3点]	提出期限を守り、次のうち2つに該当する場合 ・タイトルを書いている。 ・氏名・学籍番号を書いている。 ・送付メールに本文を書いている。 [2点]	提出期限を守り、次のうち1つに該当する場合 ・タイトルを書いている。 ・氏名・学籍番号を書いている。 ・送付メールに本文を書いている。 [1点]	提出期限を守っていない [0点]
書式	次のすべてに該当する場合 ・所定の項目をすべて記載している。 ・インタビューの比較項目を3以上設定している。 ・比較の部分(インタビュー結果)を文章(短文)として書いている。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字が少ない。 [3点]	次のうち4つ該当する場合 ・所定の項目をすべて記載している。 ・インタビューの比較項目を3以上設定している。 ・比較の部分(インタビュー結果)を文章(短文)として書いている。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字が少ない。 [2点]	次のうち3つ該当する場合 ・所定の項目をすべて記載している。 ・インタビューの比較項目を3以上設定している。 ・比較の部分(インタビュー結果)を文章(短文)として書いている。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字が少ない。 [1点]	次のうち該当するものは2つ以下の場合 ・所定の項目をすべて記載している。 ・インタビューの比較項目を3以上設定している。 ・比較の部分(インタビュー結果)を文章(短文)として書いている。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字が少ない。 [0点]
インタビューの深度(アドバイス)	文章として(できれば被調査者の言葉で)アドバイスを書き、かつアドバイス内容の理由・背景まで聴き取っている。 [3点]	文章として(できれば被調査者の言葉で)アドバイスを書いている。 [2点]	アドバイスを書いているものの、単語レベルとなっている、あるいはアドバイスと自分の意見が混ざっている。 [1点]	アドバイスが書かれていない。 [0点]
内省(考察)	・インタビュー結果を踏まえ、自らのふだんの言動を具体的に挙げ、振り返り・内省をおこなうだけでなく、外形的なことから自分の考え・価値観にまで論及している。 ・自分の考えと根拠となるインタビュー結果を結びつけている。 例)「職業人は選別は許されない(A氏)という話を聞いて、選別が多い現在の私は、職業人としての行動様式が身に付いていないと改めて知らされた。私の選別が多い理由は、授業よりアルバイトを重視しているためである。根拠にはそれほど確拠がなくても単位はもらえるだろうという考えがある」 [4~5点]	・インタビュー結果を踏まえ、自らのふだんの言動を具体的に挙げ、振り返り・内省をおこなっているものの、外形的なことから自らのみにとどまっている。 例)私はアルバイトが遅いため、翌日の選別が多い。 [4~3点]	・インタビュー結果を踏まえ、学生一般に関する反省は述べているものの、自らのことへの引き付けができていない。 例)多くの学生は授業よりもアルバイトを優先させがちである [2~1点]	・考察ではなく、感想となっている。 例)インタビューで貴重な話が聞けてよかった [0点]

教員採点 /15

図3 学習課題5 ルーブリック

まず「市民」について学ぶ。市民とは、社会の構成員としての主体性、社会に対しての権利と義務という公共性を持つことであると学ぶ。つまり、広義的な意味での社会人という概念について学ぶことになる。次に、働くということに注目し、「働く市民」として、「職業人」について学ぶ。たとえば、就業時間、服装・身だしなみ、利用者との関わり方など就業上の基本的ルール、体調管理、物の貸し借り、挨拶など社会生活上の基本的ルールについて学ぶ。そして、最後に社会を構成する専門職として、社会福祉士の価値や倫理について学ぶことになる。

(b) 課題の提示とその評価

ここでは「第8回 職業人として」の課題とその評価ルーブリックについてみていく。まず課題であるが、学生に提示された課題は、「インタビュー：職業人の常識と学生へのアドバイス」というテーマで課題に取り組んでもらった。内容は、職業に就いている2名にインタビューを依頼し、時間の使い方やお金の使い方などインタビューに

職業人と学生との比較をお願いし、最後に職業人になるためのアドバイスをもらい、それについて考察をおこなうというものである。

課題の取り組みについて、昨年度、同様のテーマを課した際、フォーマットを黒板に板書するという形で試みたが、課題提示者が意図した内容と学生がレポートした内容に大きな差異がみられた。今回は、その教訓を踏まえ、課題提示の際、資料にフォーマットおよび書き方の例示を示しておいた。そのため、昨年度のような大きな差異はみられなくなった。しかし、学生自身の創意工夫の余地を狭めてしまい、学生間の取り組みの違いは、みえにくくなり、深まりのあるインタビューをほとんど見受けることが出来なかった。学生の考察を見ると、職業人と学生との違いとして「他者(会社・社会を含む)への責任」を挙げている者が多くみられた。これは、課題提示者として学んで欲しいと考えていたことであるため、その気づきを活かすような授業展開を今後考慮すべきであると感じた。

課題9 「私が実習で学びたいこと」

		学籍番号：		名前：	
		3	2	1	0
提出作法		提出期限を守り、かつ次のすべてに該当する場合 ・タイトルを書いている。 ・氏名・学籍番号を書いている。 ・送付メールに本文を書いている。 [3点]	提出期限を守り、次のうち2つに該当している ・タイトルを書いている。 ・氏名・学籍番号を書いている。 ・送付メールに本文を書いている。 [2点]	提出期限を守り、次のうち1つに該当している ・タイトルを書いている。 ・氏名・学籍番号を書いている。 ・送付メールに本文を書いている。 [1点]	提出期限を守っていない [0点]
指定様式の遵守・文書作法		「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目について、それぞれ規定の字数(800字程度)で記述しており、次のすべてに該当している。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字がない。 [3点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目について、一方、あるいは両方とも規定の字数(800字程度)を満たしていないが、合計字数が8割以上であり、次のすべてに該当している。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字が0~2ヶ所。 [2点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目のうち一方は、一方、あるいは両方とも規定の字数(800字程度)を満たしていないが、合計字数が5割以上であり、次のうち1つに該当している。 ・「である調」で書いている。 ・誤字・脱字が0~2ヶ所。 [1点]	左記以外。 [0点]
内容	記述の具体性	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目とも、具体的であり、明確な理由が述べられている。 [3点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目とも、具体的であるが、一方、あるいは両方とも理由が述べられていない。 [2点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目のうち一方は、具体的であり理由も述べられているが、もう一方は、抽象的で具体性に乏しい記述である。 [1点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目とも、具体的な記述がない。 [0点]
内容	固有・特徴的な記述	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目とも、相談援助実習に固有の内容であり、その特徴を踏まえた記述である。 [6~8点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目のうち1つは、必ずしも相談援助実習に固有の内容とはいえないが、相談援助実習に関する内容としては概ね適切である。 [4~8点]	「学びたいこと」「期待されていること」の2つの項目とも相談援助実習に固有の内容ではないが、相談援助実習に関する内容としては許容範囲である。 [2~4点]	「学びたいこと」「期待されていること」が、相談援助実習の内容ではない。 [0点]

教員採点 /15

図4 学習課題9 ルーブリック

(c) ルーブリックによる評価の基準について

既述のとおり、学習課題5の内容は、2人の職業人に対して、「職業人と学生との比較」、「職業人になるためのアドバイス」をインタビューし、それを踏まえた考察をおこなうというものであった。以上の課題内容を含めて、作成したルーブリックが図3となる。ルーブリックを用いて評価をおこなう上で、特に重視したのは、ルーブリックの評価項目のうち「インタビューの深度」と「内省(考察)」であった。なお、学習課題5は、第8回授業の前に作成・提出を学生に求め、その結果を授業時の演習で踏まえるものとしていたが、直接的に、その課題での取り組みを用いることはできなかった。ルーブリックを用いた感想については、「インタビューの深度」の項目について、そもそも深度が期待できるような課題内容(形式を含め)ではなかった。そのため、評価のむずかしさがあったのではないだろうか。「内省・考察」について、学生は「自分の考え・価値観」を「甘い」と評価しているように伺えたが、その甘さがもたらす社会

的影響については、あまり言及されていなかったように感じた。また、これは課題設定とも関係するのだが、学生に反省を促すことに力点が置かれ学生がどのような職業人になりたいという、前向きな方向での考察を促すようにはなっていなかった。

b 課題② 実習計画の作成

(a) 授業の概要

単元「実習計画の作成」は、「第14回 実習の目的について考える」、「第15回 実習目標と実習計画」という全2回の授業で構成されている。この単元の必要性は、実習という学びの目的や目標を具体的にしていく方法を学ぶことにある。相談援助実習では、単に現場を経験するというのではなく、自分自身が主体的に「何を学びたいのか」、「何を身につけたいのか」を明確にしなくてはならない。しかし、何も指導がない状態で、これを実現することは難しい。そのために、実習計画を作成するための基礎について、この授業で学ぶの

である。本学では、具体的な実習計画の作成については、実習直前の専門的な実習指導である「相談援助実習事前指導」でおこなうことになっている。

この単元の授業の全体像であるが、まず、第14回で実習の目的「なぜ実習に行くのか」、「何のために実習をおこなうのか」の目的を明らかにし、つづく第15回で、「何を学びたいのか」、「何を身につけたいのか」と目標を具体化していく。つまり、第14回と第15回は別々の独立した授業ではなく、連動していると考えられる。そのため、前半の第14回に出席していない場合は、後半の第15回の内容を消化することが困難であると思われた。また、第4回授業「相談援助実習とは」と内容的に類似している部分もあるが、実習の目的を「社会福祉士の受験資格を取得するため」であるとか、「卒業に必要な単位であるから」というような表面的な学習をここでは求めていない。そもそも社会福祉や社会福祉士の資格に関心を持ったきっかけは何であるかを思い起こし、3年次の相談援助実習に主体的に取り組む姿勢を期待した。実習直前の実習計画の作成を滞りなく準備をおこなえるよう、授業の流れを組み立てた。

(b) 課題の提示とその評価

ここでは「第15回 実習目標と実習計画」の課題とその評価ループリックについてみていく。まず課題であるが、学生に提示された課題は「レポート「私が実習で学びたいこと」というテーマで課題に取り組んでもらった。内容は、これまでの授業で学んだことを踏まえて、相談援助実習で「1. 私は何を学びたいか」、「2. 私は社会（利用者、実習先の施設等）から何を期待されているか」について記述するというものであった。1. のテーマは、原点に戻るということを意図しており、2. のテーマは、社会福祉士国家資格取得後のビジョンについて考えさせるという意図があった。

課題の取り組みについて、「1. 私は何をまなびたいのか」という課題に対して、2年次の時点で何を学びたいかということが具体化できている学生は少ない。しかし、改めて原点に立ち戻り、「何を学びたいのか」と考えることは、決して無駄ではなく、実習を間近にそなえた2年後期であるからこそ、もう一度振り返り、3年次の相談援助実習に臨むという姿勢が必要なかもしれないと感じた。次に、「2. 私は社会（利用者、実習先の施設

等）から何を期待されているか」であるが、これは学生にとって難しい課題となった。社会福祉士国家資格を取得が目的化してしまい、資格を取得して社会にどのように貢献するのかという考えまで及んでいないのが現状であった。

(c) ループリックによる評価の基準について

既述のとおり、学習課題9は、レポート課題であり、既述の学習課題5のインタビューの評価とは異なる。課題内容としては、自分が実習で何を学びたいのかという原点に戻ることと、社会福祉士取得後のビジョンをイメージさせるという課題の意図があった。以上の課題内容を含めて、作成したループリック評価が図4となる。レポート評価におけるループリック評価を作成することは非常に難しく、比較的わかりやすい形式上の評価が多くなってしまった。特に、そのループリックの内容を考えることに悩み、学生のレポートにみられるパフォーマンスをどのように評価していくのか、さらにそれを段階別に考えていくという点に難しさを感じた。2. のテーマについては、既述のとおり、学生にとっては資格を取得することが目的となっていると感じられた。資格取得は、あくまで自己の使命・目的を達成するための手段にすぎないことを十分に認識できるようなループリック評価が必要だと感じた。

本科目は、確かに社会福祉士受験資格を取得するための要件には違いないが、ここでは社会福祉士になったら何がしたいのかを考えさせることが大切であり、実習計画の立案は、実習に臨むための一過程ではなく、「何のためにおこなうのか」、「何をしておこなうのか」という目的と目標を明確化することで、社会福祉取得後のビジョンをイメージさせることだと感じた。このようにループリックを作成することで、改めて、この授業を通じて自分が学生に伝えたいことを再確認することができた。

4. 結語

社会福祉士は、利用者に最善の利益をもたらすために一定水準の実践力が求められるという観点から、一定水準の実践力を評価する方法として、主に教育の分野で用いられているループリック評価の応用について分析し、その結果について報告してきた。本研究では、特に本学で開講している実習前教育となる相談援助実習指導Ⅱの評価方法

に対して、応用可能であるのか、実践を通じて研究を進めてきた。その結果、ルーブリック評価を用いることによって、実習に臨むために必要な一定水準の実践力を養成することは、次のような理由から可能であると考えられる。

1 つ目に、ルーブリック評価は、一定水準の実践力に達しているかどうか、そのパフォーマンスを判断するのに適しているということである。実習生が実習に臨むために必要な実践力とは、他の実習生と比較して優劣をつけるような相対評価は馴染まず、実習生一人ひとりが、その一定水準に達しているかどうか、教員が評価しなくてはならない。この点からも、その人の持つ思考、判断、スキルなど点数化出来ないものの目安を数項目に分けて記述するルーブリック評価の活用が有効であると考える。

2 つ目に、ルーブリック評価を用いることで、一定水準の実践力に至るまでの過程を明確に示すということである。実習前教育にルーブリック評価を用いることは、実習に臨むにあたって必要な実践力の目安を数項目で示すことになり、それぞれの達成度の基準を明確にしてくれる。実習生は、ルーブリック評価を提示されることで、一定水準の実践力に対して、自分が今どの基準にいるのか把握することができ、さらに自分を高める基準があれば、ルーブリック評価に記載されている内容に従って、次の基準を目指すことになる。このようにルーブリック評価を用いることによって、一定水準の実践力を養成することを可能とするのである。

3 つ目に、ルーブリック評価を活用することは、実習生に適切なフィードバックを可能とするということである。これは、実習に限ったことではなく、特にレポート課題の評価に対して言えることである。実習生のレポート課題に示された表現は、知識量を計るペーパーテストにみられるような、正しい解答はない。つまり、他の人と比較して優劣をつけるような相対評価は馴染まない。そのため、レポート評価をおこなう教員には、学生に対して、さらなる向上のためのコメントが求められる。しかし、その量が多くなれば、時間も多くなり、コメントも単純なものに陥りやすい。さらに、その基準も大きくぶれてしまうこともある。このような問題に対して、ルーブリック評価が有効となるのである。ルーブリック評価にレポート

の達成度を判断する基準が示されることによって、評価が一定となり、評価にかかる時間もそれ程長い時間係ることなく、実習生に対しては適切なコメントをフィードバックすることを可能とする。

以上のように、ルーブリック評価は有効であり、応用可能であると考えられる。しかし、その一方で、実際に作成した教員の報告をみると、ルーブリック評価を作成するという事は、それほど簡単な事ではない。特に、作成者となる教員を悩ませたのが、評価の基準の内容であろう。一般的に教育分野において用いられている、評価基準 (standard) ではなく、評価規準 (criteria) という用語である。教員を悩ませるのが、この評価規準の部分である。評価規準とは、評価の内容を示すものであり、その一方で評価基準とは、どの程度達成していれば、どのレベルなのかを判定するものさしである。教員を悩ませているのは、まさに、この評価規準 (criteria) である。既述の「ルーブリックによる評価の基準について」の報告を読むと、レポートにみられるパフォーマンスをどのように評価するのかという評価規準の検討の難しさはもちろんのこと、それを段階別に考えていくことに難しさを感じていた。確かに、一度、課したレポートの達成目的を改めて振り返る作業など、ほとんどおこなわない作業であり、さらにそれを段階別に考えるという作業は多くの教員が経験したことがない作業である。

しかし、これがルーブリック評価の持つ、もう一つの有効な面である。これは、レポート評価に限らず授業の評価の際にも言えることであるが、ルーブリック評価を作成することは、授業や課題が、学生に対して何を求めているのか、何を身につけて欲しいのか、改めて、教員自身が考えるきっかけとなるのである。そして、ルーブリック評価を通じて、授業内容や教授方法を振り返ることで、さらなる教育技術の向上を可能とする。この点については、「3. 実践報告」のルーブリック評価作成報告にもみられ、課題設定の不適切さや課題の取り組み方の傾向などから、さらなるレポート課題の取り組み方の向上に関する記述がみられる。このように、ルーブリック評価は、単に学生のパフォーマンスを評価するだけではなく、教員にとっては、ルーブリック評価を作成することで授業内容や教授方法などの教育技術の向上にも役立てることができる。

このように、実習前教育としての相談援助実習指導の評価におけるルーブリック評価の応用の可能性について、実際にルーブリック評価を作成し、その実践した成果について報告してきた。社会福祉士は「一定水準の実践力」が求められ、その基盤を作る相談援助実習においては、その人自身が持つ知識・理解を活用するパフォーマンスを評価するルーブリック評価が有効であると考えられる。しかし、点数至上主義における相対的な教育評価法で評価されることに慣れている私たちにとって、学生のパフォーマンスを評価するルーブリック評価のような絶対評価を実践することは難しい。どうしても、点数をつけることで他の学生と比較して評価してしまうのである。今回のルーブリック評価の実践でも、点数に大きく依存してしまう傾向がみられた。それではルーブリック評価を用いるまでもなく、単なる点数表になってしまう。ルーブリック評価の背景にある理論をきちんと把握し、作成の手順や形式をきちんと整理していくことが今後の課題であると思われる。

謝辞

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K071)の助成を受けたものである。

引用文献

- [1]厚生労働省. “社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律案について”
<http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/soumu/houritu/dl/166-13a.pdf>, (参照 2014-2-3)
- [2]社団法人日本社会福祉士養成校協会. “相談援助実習・実習指導ガイドライン(案)”
http://www.jascs.jp/pubcomme/20130402jissu_guideline_pubcomme.pdf, (参照 2014-4-2)
- [3]社会福祉士養成校協会関東甲信越ブロック主催

- 第8回社会福祉実習教育推進大会での基調講演。2012年12月8日宇都宮共和大学で開催。
- [4]川上富雄. “社会福祉士制度改正後の相談援助実習の課題と展望”. 駒澤大学文学部研究紀要. 駒澤大学, 2012, p. 137-167.
- [5]厚生労働省. “社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて”
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaiyou-yousei01.pdf>, (参照 2014-4-14)
- [6]米本秀仁, 安井愛美. “社会福祉実習に関する実習学生の評価について: 実習施設に対する評価及び就職意欲への影響の視点から”. 北星学園大学文学部北星論集. 北星学園大学, 1990, p. 73-119.
- [7]池田雅子, 米本秀仁. “社会福祉実習における評価について: 「実習受入先の評価」と「学生の自己評価」の比較分析を通して”. 北星学園大学文学部北星論集. 北星学園大学, 1991, p. 33-64.
- [8]高橋重宏, Bogo Marion “トロント大学大学院ソーシャルワーク学部における CBE [Competency Based Education] の最近の発展--コンペテンシ-要素・技能, 評価表を中心に”. 社会福祉研究第 51 巻. 鉄道弘済会, 1991, p. 15-21.
- [9]Harry F. Evarts “The Competency Programme of the American Management Association”. *Industrial and Commercial Training*. Vol.19, Issue.1, 1987, pp.3-7.
- [10]日本社会福祉教育学校連盟. “社会福祉教育年報 2005 年度版 [第 26 集]” 2006.
- [11]米本秀仁. “第 4 分科会 実習教育の現状と課題”. 社会福祉教育年報 2005 年度版 [第 26 集]. 日本社会福祉教育学校連盟, 2006, p. 170-220.
- [12]中村剛, 井上浩, 竹内美保. “実習教育システムに構築の試み—「教育の質」が保証された実習教育の実現に向けて—”. 社会福祉学第 49 巻第 4 号. 日本社会福祉学会, 2009, p. 158-173.
- [13]川廷宗之, 高橋流里子, 藤林慶子. “相談援助実習”. ミネルヴァ書房, 2009, p.69

Abstract

This study is the application of a new education grading system "Rubrics" in the social worker training. It was under these circumstances that there is a turning point about the social worker training in Japan. Certified Social Workers and Certified Care Workers Act was revised in 2007 and a new training curriculum was started in 2009. However, there is the problem how train the practical skill. This is the problem of standardizing a practice skill. Because Certified Social Workers must be able to give similar support for no person. Therefore, this study was studied the application of "Rubrics" which was a new evaluation method of the education.

(受付日：2014年9月14日，受理日：2014年9月25日)



小林 哲也 (こばやし てつや)

現職：大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科助教（実習担当）

明治学院大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了。
専門は社会福祉学。現在は介護保険制度について、特に居宅のサービス利用過程に焦点をあてた研究を行っている。